



発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十九号(毎月一日発行)
平成九年十二月一日

年表で読む 古平の歴史

《6》

■「二八取り」当時の 古平場所の様子

天明四年(二七四)の記録を見ま
すと、

フルヒラ 新井田喜内支配
区域へロカロイシ・サルマキ
右運上金 四十兩

秋味運上金 三十兩
産物 鯨・ホッケ・干鰯
カスベ・イリコ

八年後の寛政四年(二五三)にな
りますと、

フルヒラ 新井田喜内知行所
請負人 松前恵比須屋治助

下代 武兵衛

小判 三百兩

運上屋 モヤシヤム・フルヒ

ラ・ウタスツ・ラルマキ

家数 四十三軒

人数 八十六人

フルヒラ運上屋よりヨイチ運
上屋まで四里

これが文化四年(二八七)になりま
すと、

フルヒラ 新井田瀬平知行
請負人 松前 岡田屋源兵衛

支配人 五 平

アイヌ 男女子ども合わせて
三百人余り 番屋 四か所

区域 へロカロイシ・トマ
リ・ヲタスツ・ラルマキ

さらにこれより五十年ほど後の
安政元年(二八五)になりますと、

運上屋は百五十二坪という大き
な建物になり、回りに家が九十

四軒も建ち、舟も大小合わせて
二百七十二隻となりました。

主な産物は鯨・あわび・いり

こ・鮭・ほっけ・鰯・鰯などで

運上金は三百八十九兩余り、役

アイヌも二十二人いました。
また二年後の安政三年(二八五)

の各漁場の様子を見ると次のよ
うでした。

へロカロイシ アイヌ語で鯨

場の意味で、丸山岬続きで古平

と厚舌の間にあり、後に群来村

という名前になった。番屋、板

蔵、弁天社があり、アイヌは近

年まで五軒あったが今は絶え、

和人が山の端を切り開いて続々

と家を建てている。これは和人

が進出している証拠である。

トマリアサム 人家あり

モマサン 人家があり、寛政

のころのモマシヤムに同じ所で

ある。

カムエシリハ 丸山岬の鼻、

神霊が著しいというので木幣を

立てて祀っている。

モヤサン 番屋一棟、茅蔵、

板蔵、弁天社がある。

フルヒラ 運上屋一棟、板蔵

二十一棟、弁天社、アイヌの家

がある。アイヌの戸口は、文政

四年(二八三)に七十三軒、三百七

十四人、安政二年(二八五)に五十

五軒、二百四十一人で多い方

である。

産物 鯨・鮭・ホッケ・雑魚・
海藻が多く獲れ実に繁盛の地で
ある。

ここから余市まで陸路なく、

踏み分け路のことを支配人に話

したが笹が深く困難であるとの

ことであった。

メナシ泊 番屋、板蔵、戎社

がある。

ヲタスツ 番屋、茅蔵、稻荷

社がある。

ラルマキ 番屋、板蔵、茅蔵

戎社がある。

チャラセナイ フルヒラ、余

市の境目

古平場所です初めて建網を使用

したのは嘉永年間(二八六〜二八七)

だといわれていますが、これよ

り先、出稼ぎの漁夫が増毛・留

萌場所辺りで使っていたものが

次第に南に移って来たというの

です。しかし、後志の磯谷・歌

棄・古宇辺りで使われたのが早

いのではないか、という人もお

ります。



わが町ふるび

【4】

本間 銀湖



平成七年八月、中島グラウンド脇にB & G財団による古平海洋センターが完成しました。大きな建物で室内プールもあり、水泳教室をはじめソフトバレー、フオークダンス、空手、卓球などのほかに練習や競技に利用されています。

平成八年三月には、浜町中央団地に古平町地域福祉センターが、総工費四億七千万円で新設されました。高齢者が、健康で明るい生活をおくることができるようにと、健康衛生室、在宅老人デイサービス、センター内での入浴サービス、日を定めての給食サービスなど、スタッフをそろえて町の福祉に活動していることが、老人の人たちから大変感謝されています。運営は古平町社会福祉協議会が行っています。なお隣接してパーク

ゴルフ場が平成九年六月にオープンし、町外からの人も交えて老若男女がプレーを楽しんでいます。

町民待望の温泉が湧出！平成七年十二月から丸山のふもとでボーリングを開始していましたが、幸いなことにボーリングが成功し、五十五・三度と温度も高く、しかも泉質が神経通や筋肉痛などによく効くという、道立衛生研究所からのお墨付きのものでした。

新地町の高台に建っている旧古平高校の校舎を工費一億一千八百万円で改築し、古平湾を一望できるので名称を『一望館』とし、平成八年九月から町営で営業しています。宿泊施設はありませんが、一階に男女それぞれ低温と高温の浴槽があり、二階には大きな休憩室があつて、

町内はもちろん町外からの入浴客も多く、特に土・日曜日には観光バスなどによる客で大変な盛況ぶりです。

入浴しては休憩し、一日中楽しむことができる町民のいいこの場となっています。休憩室とロビーには、当町出身の故伊賀勇高画伯（東郷青児門下・二科会所属）の『裏町人生』二百号、現古平小学校長穂井田日出磨氏（一陽会）の『はずし娘』百三十号、東京都昭島市在住の望月一雄氏（曜玄会委員）の『落書き』百五十号の、いずれも油絵が展示されて入館者を魅せています。

禅源寺の油絵・五百羅漢は、元古平町入船町在住の種田富太郎氏の寄贈によるもので、林竹次郎氏（昭和十六年三月逝去）が二十年の歳月をかけた苦心の大作で、一人額四百七十五枚、五人ずつの大額五枚の計五百人の絵が描かれ、寺院本堂および観音堂の欄間まで掲げられていて、最近では参観者が毎日のように、特に観光バスなどの観光コースに組まれているようで

お寺では対応に追われているようです。

町政を執行する役場では、二年の歳月を要して昭和二年（一九二七）に完成、当町在住の水見元次郎氏が工事金額三万二千円余りで請け負って、建築は耐震構造で施工され、当時としては大変進歩した工事と聞かされました。

早いもので、それからもう七十年を迎えようとしています。現在では少々手狭になったようですが、古平町の記念すべき建物のひとつだろうと思っています。

（六ヶ）・褒状文面

古平郡入船町平民

仲谷 清吉

古平郡学校建設入費ノ内々
金百貳拾円差出候趣奇特ニ
付為其實銀金壹個並真綿壹
包被下候事

明治十三年三月八日

開拓使

遙かなる故郷の思い出 痛恨!

[39]

戦友松岡外与造さんの戦死

橘

義

春

敵と数十メートルの距離で向かい合つて攻撃の機会をうかがつていた、このときの第一中隊の鬼神もなく奮戦ぶりを、連隊砲の塩原分隊長は手記の中でこう書いています。

「一中隊の兵達が山頂の奪回を狙い一斉に攻撃に移るのを目を見張つて見ていた。わずかな灌木しかない山の五合目付近で、新手をくり出して来た敵と、攻め上るわが軍の歩兵との間はみるみる接近して、数十メートル隔てて手りゅう弾の投げ合いとなった。地の利を得たソ連軍の投げ下ろす手りゅう弾のさく裂音と砂塵が、またたく内に少数の友軍を包んでしまった。と、その砂塵の立ちこめる中から、死に物狂いになつてはい上ろうとする友軍、上から押しつぶすように迫る人の波、やがて両軍

が入り乱れるようになり、叫び声と共に手りゅう弾がぱつとさく裂すると次の瞬間、今まで五人見えていた友軍の兵士が三人になり、次には一人、そして最後は誰も見えなくなった。

この戦いで一中隊は鈴木中隊長が戦死、隊員の三分の一が戦死したという。

松岡さんが北極山で死闘を繰り広げていた八月十五日は、私は古屯の円形陣地で終戦になったのも知らずに、迫り来る優勢なソ連軍とすさまじい死闘を展開していた。陣地の周囲は完全に敵に包囲され、空からの銃爆撃、戦車砲、迫撃砲、山砲、自走砲などの集中攻撃で戦死者が続出した。

いまはこれまで——と、意を決した第一大隊長小林少佐は全軍に突撃命令を下した。

「第一大隊前へ！」
突撃命令と同時に、私はタコつぽ陣地を蹴つて飛び出した。目の前のソ連軍陣地へ、全員が銃剣をかざして阿修羅のようになつて突進した。

目の前を走つていた戦友が、次から次と崩れるようにツンドラの草むらの中に倒れ込んでいった。その戦友の屍を乗り越えてしゃにむに突進を続けた。

敵は日本軍のばんざい突撃に恐れをなしたのか、腰に構えた自動小銃を撃ちながら一斉に退却を始めた。逃がしてなるものかと、狙い撃ちで敵を倒しながらなおも前進した。やがて戦闘が終つたが、そこに集まつたのは二十人ぐらいであつた。二百五十人はいたのに生き残つたのは僅かこれだけであつた。小林

大隊長は戦死したという。「これより第一大隊は山岸軍曹が指揮をとる。」

と、炊事係の軍曹が名乗つた。大隊長小林少佐に代わつて、炊事係の軍曹が代行するなんて、日本陸軍の戦史に未だかつてなかった出来事ではなからうか。

またこの国境での戦いで、わが第一大隊ほど不運な過程をたどつた部隊はほかになかったであろう。大隊長と副官が戦死、各中隊長は全員戦死、ほか軍医、将校、見習士官もほとんどが戦死、各中隊の下士官、兵も壊滅に近い惨憺たる状態であつた。

大隊長の命令で、「生き残つた者は八方山の連隊本部へ行き状況を報告せよ。」とのことだったので、私たちは死にもの狂いで敵の包囲網を突破し、八方山までの逃避行を続けて、ようやくの思いで連隊本部の指揮下に入るこゝろができたのである。

八月十八日、連隊長命令として「明朝、黎明を期して全軍一斉突撃をする」という伝達があつた。突撃して玉碎せよ、というこゝろである。

古屯の円形陣地での激戦で奇跡的に助かつた命、明日は夜明けと共に敵陣に突入し、思いっきり大暴れして戦死した戦友の仇を討ち八方山の華と散るか、どうせ助からない命だ、もう何も怖いものはなかった。

卓食の民庶

カレーライス!?

福井幸平

ときにはこんな会話も出る。

「カレーライス」か「ライスカレー」か!

年寄りにとつても関心事かも知れない。誰もはっきりした解答はない。ただこれぐらい皆に好かれる食べ物も珍しい。

もう日本食文化として、家庭ではそれぞれ風味もアレンジしてまさに日本食の一部である。偶然かどうか:「今日なんのご馳走?」と聞けば、「ライスカレー!」

「あれっ:おらいで(自分の家のこと)もカレーだで、めエがったで(美味かった)」さらに「おらいではツブのカレーだった」とか、具の内容まで

話すことも珍しくない。

最近はずいいたくになったのか豚か牛をたつぷりと使うので、年寄りもつい食べ過ぎ——?

これを書いていたら、側にいた寺参りのおばおちゃんが「お寺ではひき肉を入れたカレーを作りますよ。」とのこと。なるほど、固い肉なら困るから、親

田心い山の作品を山出品

文化祭にちなんで

渡辺ハツエ

十月二十六日、お友達と連れ立って、文化会館へ文化祭作品展示会の観賞に出かけました。広い会場にはずらり並んだ各部門の力作が揃い、ただただ驚きました。私の愚作・短歌も、個人部門で展示会の仲間入りをさせていただきました。

短歌は亡夫が健在だった頃に詠んだ歌で、愚作お恥ずかしい限りです。

暁の月仰ぎつつ急ぎゆく翁ひたすら大漁を夢みるならん

切に食べ易いようにひき肉を使うのか、と感心した。

とんかつ・ラーメン・ぎょうざ・マカロニー・コロツケ・サラダ・すき焼き・ビフテキなどでも日本風にアレンジされ、庶民の料理になり、まあ料理もすっかり国際化したものだ。少し古い話になるが、元古平

待ちまちしタコ箱仕掛ける日

となりてエンジン轟かせ漁夫ら出でゆく

容赦なく舟揚げ場にも降りし雪いたわり合いつつ老いら除けおり

荒れ狂う波に幾度幾十度漁具傷め夫はひたすら耐えき

木の葉の如しとも思う小舟にこの朝も波荒き海に夫出で行きぬ

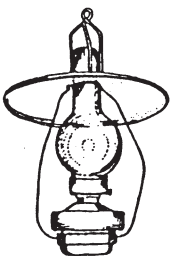
十月三十一日、一週間の展示期間もあつという間に過ぎ、翌

郵便局長の大沢さんが在世のころ、奥さんがご馳走してくれたカレーはコンビーフだった。(めったにお目にかかれない。あの風味が忘れられない)

古平では古平なりにタコ・エビ・ツブ・かまぼこ・ぶり(昔はぶりが大漁だった)等々。家では前日余ったカツレツを利用することも。たぶん私の知らないカレーが方々にあるだろう。戦前はいいカレー(ご飯が無いから)などもあった。

日、会場に行つて作品を搬出してきました。作品を亡夫の霊前に供えて報告をしてから、元気で漁業に従事していた亡夫の漁師人生の生きざまをしみじみとしのびました。合掌

ちなみに、十一月三日・文化の日には朝から好天に恵まれました。早朝に国旗を掲げてお祝をしました。



ほうきぐさ

竹内こと

鯨場も終り、夏になると干し場や納屋などのすみずみまで、空き地の至るところに生えるのが篝草（ほうきぐさ）でした。

雑草のようにところどころかまわず生えてきますが、どこの家でもこのほうきぐさを大事にしていました。お盆も過ぎた頃になるとこれを刈り取って乾燥させます。よく乾燥したものを手でもんで種を落としてから、根本の近くの茎を掻きとって、ひと握りぐらに束ねてはほうきを何本も作っていました。そして春になり、また鯨場の若い衆が来る頃になるとその新しいほうきで、番屋の中の掃除から軒下のクモの巣まで払い、きれいにし

て鯨場の準備を迎えます。

そんなことから番屋の管理をしていた父は、時期になるとひまを見てはよくほうき作りをしていたものでした。

昔は、このほうきぐさがよく

使われました。毎日の庭掃きや家の廻りの掃除、春や秋の衛生掃除、また、お盆のお墓の掃除には必ず新しいほうきを持って行って使いました。特に昔は家の玄関は土間が多かったので、掃いた後にきれいなほうきのすじがつくので、それがとても清潔な感じがして気持ちのいいものでした。ほうきは生活の必需品でしたから、ほうきぐさは大切なその材料でした。

昔の人は、生活の中で少しでも利用できるものであればそれを有効に利用していました。あんなに生え茂っていたほうきぐさが、今はどうしたわけかさっぱり見えません。

現在売られているほうきは竹ぼうきもありますがビニール製のものも多く、使った感じがかたくて、ほうきぐさのような柔らかさがないように思います。

今ごろはどここの家でも軒下に

ほうきぐさを干していたのですが、今ではもうまったく見られない風景です。昔のことを思い出して書いてみましたが、電気掃除機の時代なので懐かしいのかも知れません。



川柳

渡辺ハツエ

平均寿命生きるつもり
の義歯入れる
漬物の時季です
亡母が顔を出し
節くれ手老いを
支えて共に生き
仏飯を上手に盛れた
日の安堵

（北海タイムス 11/18・北のうた柳壇入選）

石井愛子

気どつてもかくせぬ
老いの皺の数
打つ雨に洗ひ流した
愚痴いくつ
失楽園関係ないと
祖母の皺

（北海タイムス 11/10・北のうた柳壇入選）

「奇贈」にお礼

▽常本利男さん

・感謝状、表彰状 二十六点

・主として契約書 六十九点

・証書類 三十二点

・その他古文書類 二十八点

▽田中勇夫さん

・毛皮外套ほか 三点

・封書、はがき（主として明治、大正時代） 約三百点

・証書類、その他 二十三点

貴重な資料をいただきました。ありがとうございます。

吉平ホトトギス会

齊藤波留 越野清治 福井幸平 山口悦子 大和田絵伊 岩瀬みのる 木村芳園 長谷川和子 水見旬丈 山口浪 大島喜恵 仲谷美砂 仲谷比呂子 越野スミ子 越野敏雄 仲谷安代

開拓使

短歌

岬短歌会詠草

霜枯れし庭に咲きつぐパンヂーを鉢に上げをり小春日今日は	白じろと参道に立つ霜柱踏みしめ夫は朝拝にゆく	風邪に伏し子の家で聞く夜の雷屋根に落つるがに響き渡りぬ	シーズンオフとなるを惜しみて人多きパークゴルフ場に秋日さす	電話の声明るし子等みな幼ないが元気です叔母さん長生きしてねと	軒先に鯖の目ざしともらひし柿並べつるして秋の深まる	晩秋に咲くのを待ちて楽しむに庭の残り菊に時ならぬ雪	久々に会ひて病歴を問ひくれし友もこの病院に通ひゐるといふ	われはまだ訪はねど母の生れし土地十勝河西をテレビにて見る	病む吾に誕生祝うと智子よりの三点セットのバジヤマは温し	公園の木々は大方葉を落し白樺の幹の白きが目立つ	禅源寺のいちょうの大木にあまたの寒風に揺れをり青空の下	積丹岳仰ぎてゆけばなつかしも麓を拓きし今亡き君ら
東	山	堀	堀	長	丹	田	竹	鈴	菅	榊	越	池
美	口	典	昭	崎	後	中	内	木	原	佳	田	田
知	ス	子	子	フ	初	香	コ	時	節	代	由	テ
	エ			ユ	江	苗	ト	子	子		起	ル

- ・てをあげるⅡ持てあます、どうにもならない、降参する
- ・てきⅡ彼、あいつ（相手を^や擲^ちする）
- ・でめんどりⅡ日雇いの労働者
- ・てつかえしⅡ（綿の入った）刺した布製の手袋、（布だけを刺したものもある）
- ・ではるⅡ出向く、顔出す
- ・てらっぱげⅡつるつるに禿げた頭
- ・てんⅡところてんを略して言う
- ・てんまりⅡてまり、ゴムまり

古平の方言

(10)

- ・どした、どしてるⅡどうした、どうしている
- ・としよりⅡ年寄り
- ・とつかがるⅡ取りかかる、（相手を）襲う
- ・「いついっきなりとつかがっていったと」
- ・とっぱらうⅡ取り払う
- ・とが、とんがⅡ唐鍬（とうぐわ）
- ・どす、どつすⅡ人をのしる、ばか野郎！
- ・とつくりかえすⅡひっくり返す、裏返し
- ・とつちやⅡお父さん、中年の男の人
- ・どつてんこいだⅡ大変びっくりした、大変驚いた
- ・どまずくⅡあわててまどつく、どきまど
- ・どやすⅡ怒鳴りつける、どうする？

- ・とろなぎⅡ海がとろつとしたようななぎ、あぶらなぎともいう
- ・どんぐいⅡいたどり
- ・どんざⅡ刺し子の作業衣
- ・どんずⅡ肛門
- ・どんだⅡどうだ（心配して聞く時と、どうだ！と胸を張る）
- ・「からだの具合、どんだ」
- ・「おれにかなわねべ、どんだ！」
- ・どんだばⅡどうだ！、ざまあみろ
- ・どんでⅡこんでⅡでたらめ、いいかげん
- ・どんべⅡ濁酒（どぶろく）、甘酒に酒を入れたもの
- ・なきべそⅡすぐに泣く子をはやす、泣きそう、泣き顔
- ・「あの、泣きべそ」
- ・なした、なしてⅡどうした、どうして
- ・なずぎⅡ額（ひたい）、おでこ
- ・なだじⅡお前たち、お前ら
- ・なっぱふくⅡ（青色の）つなぎの作業服
- ・なにこぐだⅡ（悪いことをしているような時）何をしているんだ、何をするんだ
- ・なまこⅡ生意気、要領がいい
- ・なまずるⅡ悪い、意地悪い、腹黒い
- ・なまらⅡ非常に、大変
- ・なまらはんかⅡ（生半可Ⅱなまはんか）
- ・いい加減、責任がない、中途半端



▼「せたかむい」を読まれて、「これを書いたのはどこの方ですか」とよく聞かれることがあります。それで前号では住所を付記しておきました。

▼『古平の方言』について、何人かの方からは「こんな言葉もあったようだ」と、教えてもらうことがあります。

古平の独特の言葉というものはほとんどありませんし、多くは古平へ移住して来た人たちの出身地で使われていたものか、それが変わったか、また、それらが混じりあったものが使われていたようです。

ここでは標準語とは多少違った言葉で、古平で使われていた言葉をあげてみました。同じ言葉でも、意味の違うものや、アクセントのかなり違うようなものは載せました。

連載のあと再検討をして、また一冊にまとめたものをご希望の方にお配りしたいと考えております。